

私は、祖父と父が大工をしている職人の家庭で、  
三人兄弟の長男として生まれました。

最初に父に連れられ現場に足を踏み入れたのは、幼稚園の年長組の頃。  
軽井沢の別荘工事の現場で、木っ端やカンナ屑を拾い集めるところから  
私の建築人生がスタートしました。



## この道35年の理由

私が生まれた家は、祖父が若い頃に現場で余った木材を使って建てた家で、幼い私は家族の手前言えなかったものの、この古くてもすばらしい家で暮らしていることがイヤでたまりませんでした。

この家は薪風呂で、風呂を沸かすのは小学校1年生の頃から私の係と決められていました。夕方になると手斧を持って、家の裏手に廻り、来る日も来る日も薪割りや風呂の焚き付けをやっていました。「なんで僕の家だけ…」と思いながらやっていた毎日の作業でしたが、実はこの薪割りで基本的な木材の見分け方を体得できたのかもしれない。

小学生に手斧を持たせる家ですから、まだ幼い私でも容赦なく父の現場の手伝いに駆り出されます。

父の運転するトラックの助手席に乗って、朝8時に家を出ます。

現場に着くとゴミ袋を持たされ、作業中の職人さんの間を廻りながら木っ端やカンナ屑を拾い集めるのが私の役目です。お昼に母の手製のお弁当を食べて、午後も同じように日が暮れるまで父の手伝いをします。春夏冬の長い休みの時は、こうして父と一緒に現場に通い、職人さん達には「かずちゃん」と呼ばれ可愛がってもらうようになりました。

小学校高学年になると金物屋の屋号入りの釘袋を与えられました。これを腰に下げ、石膏ボード用の垂鉛釘を入れて、小さな玄能（金槌）を持って壁の石膏ボードの釘打ちをします。小さな身体で、石膏ボード運びもやりました。それでも当時の私は「大人になったらオモチャ屋さんになりたい!」と夢見ていたので、まさか成人してから

この世界に入るとは夢にも思っていませんでした。

昔は、今のようにコンプレッサーの釘打ち機も、電動ドライバーも無かった時代です。子供の私でも皆に重宝されて出来る仕事は沢山ありました。

父は漫画の“星一徹”のような人で「寡黙・厳しい・すぐキレル」の三拍子揃った職人でしたが、作業場で仕事を手伝う日には、3時休憩になると私にお駄賃を渡し、近所のお婆さんがやっている焼きまんじゅう屋へお茶菓子を買に行かせてくれたこともありました。

## 仕事と勉強の違い

父の洗脳(?)のような逆英才教育が効を奏して、私は職人の端くれのような子供に成長しました。振り返ると、児童福祉法に抵触するのでは!?!と覚えてくる勤労少年生活は続き、中学生になると、ノミは持たせてもらえないものの、加工機械を使い梁に穴を開けたり、柱のホソを刻んだりといったレベルに到達していました。職人の仕事は目に見えて上達が判るので、仕事を覚えれば覚えるほどに面白さを感じ始めていました。

そうすると、自然と学校の勉強があるそかになり、私の勉強離れはどんどん加速していきました。中学校3年生になって、いざ高校受験となり、父からは「高崎工業高校の建築科へ行け」と言い渡されます。



当時の担任の先生にそれを告げると「今のお前の成績では200%無理だ」と忘れもしない言葉が返ってきました。なんせ、当時の私の学力は小学校高学年レベルの問題すら解けない状況だったのですから…。

この頃の私は、不良グループには属していないものの学習に対しては、真面目な生徒ではありませんでした。

父に先生の話伝えても、志望校の変更は許されないどころか、滑り止めとして併願受験が一般的になっていた時代にもかかわらず「男なんだから一本勝負してこい!」と…バクチでもあるまいし勘弁してくれと思いましたが、相手は頑固親父です。

## 人生初めての勉強

こうなると、私もそれまでのように“勉強する意味が判らない”などと屁理屈は言っていられない状況に追い込まれました。中学3年の夏休みは初めて現場には行かず、夏期講習を受け机にかじり付いて過ごす事になりました。

必死な勉強の成果で、乾いたスポンジが水を吸収するように成績が上がり始め、200%無理だと言った先生も受験直前になると「もししたら受かるかもしれない」と言うようになりました。

私自身も「やるだけのことはやった！悔いはない!」と、試験当日を迎えたのを覚えています。

結果、私の努力は報われて高崎工業高校建築科に合格しましたが、高校生になっても私の現場生活は変わらず続きました。

美味しい給食と仲間に恵まれた高校生活も、3年生になり就職活動の時期になります。求人票にあった地元中堅ゼネコンに就職が決まり、当時バブル絶頂期の建築業界へ足を踏み入れる事になります。

高校卒業後も入社前日まで、父の現場で働きました。こうして現場で育ったような私ですから、S社で現場監督として働くのにも自信がありました。

## いよいよ建築の道へ

S社は当時社員が15人程で大企業ではない分、やればやっただけ適正な評価が貰える雰囲気がありました。

S社で私が最初に足を踏み入れたのは高崎市内の鉄筋コンクリート造りの市営住宅の現場でした。そこでまず任された仕事は現場の掃除です。3ヶ月間ひたすら一日中“現場の掃除のみ”。

子供の頃からの現場経験で、いっばしに現場を知っているんだ!と思い込んでいた私は、父の現場の掃除をしていた小学生の頃と同じ、振り出し地点に戻ってしまいました…。

